

ゲーテにおける粹物語：メールヒェン・ノヴェレ・ロマーン

木田, 綾子

<http://hdl.handle.net/2324/1500464>

出版情報：Kyushu University, 2014, 博士（文学）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏名	木田 綾子			
論文名	ゲーテにおける枠物語——メールヒェン・ノヴェレ・ロマーン			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	小黒 康正
	副査	九州大学	教授	鶴飼 信光
	副査	九州大学	准教授	東口 豊
	副査	九州大学	准教授	武田 利勝

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまでの研究で看過されてきた枠物語という観点から、ゲーテの散文作品を読み解く論攷である。

『ドイツ避難民の談話』(1795)、『親和力』(1809)、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1829)は、非常に関連性が高い。『遍歴時代』は、一方で内容的に『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1795/96)の続編でありながら、他方で『談話』の形式的構想を引継いで成立し、しかも『談話』の続編として構想された挿話が『親和力』として独立したのであった。このような複雑な成立過程を経て、『談話』は「メールヒェン」を、『親和力』は「隣り同士の不可思議な子供たち—ノヴェレ」を、『遍歴時代』は「新メルジューネ」を挿話として組み込み、それぞれが「枠」を有する作品として成立したのである。本論文によれば、ゲーテは古典的な文学形式を巧みに用いながら、「ロマーン」という新ジャンルにやはり新たなジャンルである「ノヴェレ」や「メールヒェン」を挿入することで、新たな表現可能性を探ったのであった。

本論文の第一章は、古典的な形式が色濃く残る『談話』を、ゲーテが枠物語形式を用いた第一段階として示す。第二章では「ロマーン」という副題の付いた『親和力』全体と「ノヴェレ」という挿話との特異な対照性を第二段階として検討し、更に第三章では第三段階である『遍歴時代』の挿話「新メルジューネ」が「メールヒェン」や「隣り同士の不可思議な子どもたち—ノヴェレ」と密接に関連することを指摘した。併せて、『若きヴェルターの悩み』(1774)において、情感あふれる主人公の内面吐露が大きな枠で括られることで、枠の内と外に「不思議な親和」がもたらされたという Exkurs の考察も実に興味深い。

詰まる所、ゲーテは枠物語という古典的な文学形式をただ単に踏襲したのではない。本論文によれば、固定的な枠組みがあるからこそ、逆に固定化されない内との照応関係が生じ、ゲーテはそれを「人間の自然」をめぐる内と外のダイナミズムとして自家薬籠中の物としたのである。この時、古典的な文学形式が新たに甦るとともに、「物語の中の物語」がメールヒェンそしてノヴェレとして独自の生を獲得したのであった。

以上のとおり、本論文は、膨大な作品群を丁寧に繙きながら、ゲーテ文学を新たに問いなおす労作に他ならない。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力をもつことを認め、ここに報告する。